

ドイツと日本においてベルリン・オリンピックがもたらしたもの

The influence of 1936 Olympic Games in Germany and Japan

1K11C077-4 蛭原綾乃

主査 石井昌幸 先生

副査 寒川恒夫 先生

【第一章 はじめに】

オリンピックにおける事件やテロ行為は止まることをしらず、過激派組織や武装組織による事件やテロがたびたび起こる。これはオリンピックに限ったことではなく、大規模なスポーツイベントでも頻発している。彼らの目的は「宣伝」を行うことである。世界中の人間が集まる場所で、彼らは主張を繰り返す。宣伝的に有用性があるからこそ、オリンピックはテロ事件の舞台となり、また広告ビジネスの場ともなる。このことに最初に気付いたのは、1930年代ドイツを牛耳っていたナチス党である。ナチスがどのようにしてスポーツを利用した宣伝に手を染めていったのか彼らのプロパガンダの考えと、ベルリン大会が当時のドイツ、そして日本に何をもたらしたのかを考察していきたい。

【第二章 ベルリンオリンピックとナチス・ドイツ】

オリンピックにはふたつ時代があり、「古代オリンピック」「近代オリンピック」に分かれる。古代オリンピックは古代ギリシアにおいて開催された神々にささげるための祭典であり、スポーツイベントというより宗教的意味合いが強かった。近代オリンピックは1896年第一回大会がアテネにて開催されたものであり、現代の、平和と国際理解のためのオリンピックである。一方ナチス党の目的は優れた民族、アーリア人でドイツ、ゆくゆくは世界を支配することであった。ヒトラーにオリンピックの提案をしたのはナチス党宣伝省である。彼らが最初にオリンピックの有用性に気付いたのだった。ドイツの持つ近代的な能力を他国にアピールしアーリア人優勢説を浸透させるとともに、ユダヤ人への差別を隠ぺいするのにつけての祭りであった。ナチス党の人間はみな、ドイツ人の祖先はアーリア人的特徴（金髪、碧眼、高身長）を持っている古代ギリシアの人々であると信じていた。そして古代ギリシアとの繋がりを誇示するために、現代まで続く「聖火リレー」を編み出したのであった。

【第三章、ベルリンオリンピックと日本】

ベルリンオリンピックに、報道のため派遣された3人の文学者がいる。西條八十、武者小路実篤、横光利一である。この中でも西條八十は前々からスポーツに関する

詩などを発表しており、特にスポーツに対して関心が高かったとみられる。大会期間中、彼は日本人選手が良い結果を残すたびにその様子を詩に乗せ、国際電話で新聞社に口頭で伝えていた。八十は当時流行の作詞家でもあり、彼の躍動感ある文に乗せられた選手たちの姿は、国民にポジティブで、いかにも先進国然としたドイツのイメージを植え付けていただろうと考える。

飾られたオリンピックの情景のほかにも、技術的な面でも影響を受けている。電送写真、今のファクシミリの元となった通信機器である。国内では1925年に初めて使用され、昭和天皇の即位式の報道に使用されるなどしていた。しかし、海外との通信は例がなく、このベルリン大会におけるドイツー日本間の通信が初となる。このことは日本の新聞業界に大きなものをもたらした。当時写真は飛行機または船、国内なら伝書鳩を使って運んでいたため、遠方で昨日今日撮った写真を報道に使用することは不可能だったのである。それが電送写真機の導入によって可能になり、目新しく鮮やかな外国の様子をありありと伝えることができるようになったのである。

新聞だけでなく、ラジオにおいても日本史上初の海外実況生中継が行われるなど、メディア界においてベルリン大会は大きな風を巻き起こした。

【第四章 おわりに】

ベルリンオリンピックがもたらしたものは2つ、ナチス党が推し進める民族主義的支配のカモフラージュ、現代につながる情報メディアの発達への貢献だと言える。そして、どちらもナチス党が醸し出す見かけ上の「美」に騙された結果である。壮麗なスタジアムに圧倒され大衆はドイツを素晴らしい国だと感じ、その会場で起こるドラマを知りたいがために努力し、日本人は快挙を成し遂げたのである。ナチスのデザインは美しい。人間の思考の道順を知っているから「美」と言われるものを創造できるのである。その人自身の「美しい」という感情は実際自分が感じたことであるし、自分に嘘はついていない。しかしナチスの大衆操作の戦略を知ってしまうと、「美」という感情に対し、どこか自分のものでないような不安を感じる。ベルリンオリンピックは、計算されきっているという意味ではオリンピック史上もっとも美しい大会であると同時に、もっとも不安を駆りたてる、平和とは真逆の大会であったと考える。